

「ウンドウカイ」という名の

フェスティバル

末永卓幸

闘争民族の血を受け継ぐ祭り『ウンドウカイ』



メインイベントの一つ、一般男子の「カケッコ」

ヨーイドン！ スタートラインについた選手たちが日本語の号令の下に一斉に飛び出す。

場内アナウンスでは、コンゴウリレー（混合リレー）、レンゴウリレー（連合リレー）、イッシユウ（二周）、ハッシユウ（八周）、などと言った日本語種目の案内が流れている。

ここは、ミクロネシアのチューク（トラック）諸島。グランドでは昔ながらの日本の運動会そのままに、現地の人達によってスポーツゲームが行なわれている。

十月中旬、モエン本島（日本名・春島）で行なわれた全島大会の一コマである。

ゴールに駆け込む選手達は、競技の係員によって、イットウ（一等）、ニトウ（二等）、サントウ（三等）と呼ばれ小旗を持って表彰台に足を運んでいる。そこでセンシユ（選手）が手にするのは、シヨウヒン（賞品）だったり、シヨウキン（賞金）だったりする。

そして彼らはこのスポーツの祭典を、「ウンドウカイ」と呼んでいる。

そこには日本人の姿はまったく見えない。

ましてや日本人主催による催しでもない。

しかし目に映る光景は日本の運動会そのものである。

これは、いったい何処から来たものなのか……？

それは遠く、一〇〇年以上も前の日本統治時代にまでさかのぼる。

チューク諸島（トラック諸島）をはじめとするミクロネシアは一九一四年（第一次世界大戦）〜四五年（太平洋戦争終結）まで日本の統治領だった。

当時、チューク諸島の中心だったデュブロン島（夏島）には、大正天皇の即位を記念して、大きな運動公園が造営された。島には街が開け、学校や役所、数多くの商店や会社などがあった。後年には日本陸海軍の一大基地が設けられ、多くの一般市民をはじめ、沢山の兵隊や軍艦が島に溢れていたのである。それらの部隊や軍艦、自治体や団体などでは、士気を高めたり、交流を図るため、盛んにスポーツが奨励された。運動会もその一環で、そしてそれはチュークの人達に対し



クミ（組・チーム）のベースキャンプ



二クミ（2組・チーム名）



オバチャンのカケッコ



オバチャンのオーエン（応援）

「NIKUMI」と書かれている。
 センシユ（選手）、カケアシ（駆け足）、レンシユウ（練習）、ガンバレ（頑張れ）、オーエン（応援）、など、運動会関連の言葉も数多く残っており、グラント内外で今でもよく耳にする言葉である。

オーエンはとても賑やかで、興に乗って来ると、グラントのそこかしこで激しいオーエン合戦が始まる。「ガーンバレ〜、ガンバレ〜」と言った応援歌が、あちこちのチームから聞こえてくる。お相撲さんばりに太った現地のおバサンたちが選手団の前に出て、狂ったように踊りだす……。それを合図に、あちこちのチームの前に、それに

負けじとまたオバサンたちや若者たちが即興の歌や踊りでグラントを盛り上げる。そうなるともう、競技はそっちのけでグラント内は歌や歓声で騒然となる。

グラントの周りには、たくさんの出店が並び、学校や官庁はほとんどが休みとなる。

島中のポリスが総動員され、周辺道路の交通整理や警備に当たっている。

子供から大人まで、老若男女、正に島を挙げての大運動会を楽しむことになる。

丁度この運動会が行なわれていた十月のある日、日本から外務省を通じてとある使節団が到着した。この団体は州知事への表敬訪問をはじめ、現地政府との懇談をするべく、日本政府を通じてチユーク州政府にアポイントメントを取っていた。ところが、団体が空港に到着する直前、「本日の州政府訪問は見合わせて欲しい」との連絡が入ってきた。

理由がふるっている。

「州知事はじめ、政府の要人は全てウンドウカイに出席しているため、お会いできない」というものであった。「ウンドウカイ」は、政府間レベルの用件を反故に出来るほど彼らにとっては重要なものなのである。

全島大会ともなると、各島々では何ヶ月も前から選手を

選考し、選手に選ばれた戦士達は、仕事も家事もほったらかしで、ひたすらレンシユウに励む。島々にはろくなグラントもないので、ちよつとした広場や道路などがそのレンシユウの場となる。月夜の夜ともなれば夜遅くまで道路でレンシユウに励む女や男達を見かける。

期日まで数週間ともなると、各チームは合宿に突入する。島の人達は選手のために、合宿の場所や、食べ物、飲み物などを、競って提供する。

「ウンドウカイ」は全島を挙げてのお祭り、一大イベントなのだ。そしてこの模様は州政府のラジオ局を通してチユーク諸島全域に実況中継される。

大会当日の早朝、各島々から沢山のボートで集まってきた選手団は、ユニフォームに身をかため、港に集結する。そしてそれぞれのチームが州旗や団旗をひるがえし、グラントまでの約一キロの道のりを、大声を張り上げ手を打ち鳴らし、応援歌を歌いながらゆつくりと行進してゆく。彼ら選手団の熱気は行き交う人達を巻き込み、その興奮は次第に島中に広がってゆく。

演じられる種目は、日本時代の伝統的な種目や、短・中・長距離各種リレーなどの陸上競技種目がメインで、一般男子による「椰子の実割り競争」や、女性による「椰子の葉っぱを使った「バスケット編み競争」などローカル色豊かな種目もいくつか用意されている。中でも彼らの最も興味をそそる種目はリレー競技だ。小さい子供達から、女、男、まで、ありとあらゆるリレーが次から次へと



「ウンドウカイ」へのコーシン（街中の行進）



バスケット編み競争（一般女子）

あらゆるリレーが次から次へと



観衆を熱狂させる「リレー」



ヤシの実むき競争 (一般男子)

展開されてゆく。

雨や嵐もなんのその、彼らの「ウンドウカイ」は必ず「雨天決行」である。

日本のように「雨天中止」はあり得ない。

彼らはむしろ、悪天候や予期せぬアクシデントなどから来る予想外なレース展開を最も好む。グラランドは雨でドロドロ、それでもリレーは決行される。先頭を走っている選

の戦いの姿だったのかもしれない。パプアニューギニアに今も残るシングシングの祭り。彼らもまた、闘争民族の血を発散させるために、この戦闘のダンスを今に伝えている。

「ウンドウカイ」をかくも熱狂的な闘争の場とする彼らの戦いの根源は、彼ら自身の民族の血から来るものであろう。彼らの闘争本能を存分に受け入れ、発散させる「ウンドウカイ」は、島社会を平和に保つための潤滑油ともなっている。文明人達によって「闘争」という腕をもちがれた彼らにとって、「ウンドウカイ」はむしろ、彼らの血を受け継いでいく恰好のお祭りだと言えよう。

闘争民族の血を受け継ぐ祭り「ウンドウカイ」
ガンバレ！ チューク族の戦士達！



木の上からも競技を見守る観衆

手が足を滑らせて転倒する。強者の足を引っ張る。だが勝つか負けるか、全く予想もつかない。そうなるともうグラランド内はヤンヤの喝采である。

ルールを重要視し、比較的紳士的に遂行される日本の学校の運動会とは趣きを異にするこの破天荒な争いの「ウンドウカイ」こそが、彼らの本領発揮の場なのである。

「地理上の発見」と言われた大航海時代、チュークの環礁内に入った外国船は度々現地人の襲撃を受けてきた。その悪名は、ヨーロッパの航海者達の間では長く言い伝えられており、その後、長い間ヨーロッパ人の上陸や入港を阻んできた。

明治の半ば、一人の日本人が当時開設したばかりの貿易会社の社員としてチュークの島に上陸する。彼は現地人社会に溶け込むべく、鉄砲と日本刀で武装し先陣を切って部族間闘争の輪の中に飛び込んでいった。文明人が上陸するほんの百年程前まで、彼らは日本の戦国時代同様、部族間で闘争を繰り返していた人達だったのである。

平和な社会となった今、彼らの闘争の血をぶつけるものはスポーツを置いて他にはない。闘争のはけ口を失った彼らが日本時代に遭遇した「ウンドウカイ」は、彼らの恰好



末永卓幸

すえなが たかゆき
1949 長崎県対馬市生まれ
立正大学文学部地理学科卒業
後、日本観光専門学校卒業
仲間4人とミクロネシア・チューク諸島を1か月間旅行
以後、旅行会社勤務を経て、1978年チューク諸島に移住し旅行会社を設立
現地で旅行会社を運営する傍ら、日本統治時代の調査研究・保存等に努める
現在チューク諸島在住

受賞の言葉

末永卓幸

この度、御社の栄えある賞を承りましたこと、心から感謝申し上げます。

若い頃から随筆が好きで、エッセイにもとても興味を抱いておりました。南の島に住むようになり、様々な出来事を綴るようになっていました。

御社のエッセイ募集の企画を知りましてからは、エッセイを書くことは私にとって人生の励みとなっています。これからもエッセイを書くことを人生の糧として、楽しく生きたいと思っています。ありがとうございました。